

## 「鳥越城と加賀一向一揆の終末」



白山市鳥越地区にある国指定史跡鳥越城は、中世の城には珍しく城門や櫓の建物も復元され、城内を自由に見学できます。

この城に関わった戦国時代の人々のお話をしましょう。

長享二年（1488）夏、今から五百年以上も前のころのことです。加賀の守護富樫政親が立て籠もっていた金沢市の高尾の城を、夥しい数の一向宗と呼ばれた浄土真宗の門徒を中心とする軍勢が取り囲んでいました。政親の叔父前守護富樫泰高を一揆の総大将とし野々市にあった大乘寺に本陣を構え、平野部は石川郡と能美郡の一揆の軍勢が埋め尽くしていました。城の背後の山間を白山宮や金劔宮の衆徒が、手取谷を山内衆が陣を張り、越中境を河北郡の軍勢、越前境を江沼郡の軍勢が布陣していたのです。六月九日一揆軍の総攻めによって城主政親は切腹し落城します。「一揆衆二十万人」と記録され、加賀と能登の人々が全て集まってきたというほどの大軍勢でした（註）。

これが「加賀一向一揆」と歴史の教科書に載る長享の一揆です。一揆が加賀支配の実権を握った戦いでした。以後、加賀国は「百姓の持ちたる国」と見なされ、僧、武士、商人、職人、農民らによる自治が百年近く続くこととなります。

天文十五（1546）年（戦国時代半ば）小立野台地に、金沢城に先駆けて、金沢御堂が加賀一向一揆の政治と信仰の拠点として建立されます。それ以降、加賀は本願寺の直接支配が始まり、白山麓を根拠とする山内衆は加賀国内での地位を次第に高めてゆくののです。

元亀元（1570）年、大坂本願寺が尾張の織田信長との全面戦争に入ると、山内衆らによって築城された巨大な鳥越城は、加賀一向一揆と山内組の輝かしい自由自治の象徴的な城として歴史に登場することになるのです。

（註）当時の加賀能登の人口は、現在の石川県の人口115万人（2016年）の20%強－30%弱ほどであると想像できます。20万人という大軍は、実際は北陸全域から参集したものと考えられます。

登場人物（武将）

（天正8年当時、推定年齢）

織田信長方

尾張の戦国大名 織田信長 下剋上でのし上がってきた。「天下布武」を掲げ、天下統一を目指します。最大の好敵手本願寺（一向一揆）と10年余り激闘を展開することになります。（47）

北陸方面総大将 柴田勝家 1522-1583 （58）

勝家の甥尾山城主 佐久間盛政 1554-1583 （26）

○加賀一向一揆方（山内衆・武将）／主人公

鈴木出羽守（二曲右京進） 義明 鳥越城・二曲城城主・山内組旗本 （40-50代）

長男 鈴木右京進（歴代右京之進を名乗る） （20代後半）

四男 鈴木采女 （10代半すぎ～20代）

牛首組頭領（武将） 加藤籐兵衛則吉50代 加藤籐兵衛則親（息子）20代（歴代籐兵衛を名乗る）

吉野組頭領（武将） 吉野源次郎・佐良九兵衛（20代）

金沢御堂御蔵衆（本山大坂本願寺から赴任した武将＝政治軍事指導者）

本願寺坊官金沢御堂武将加賀一向一揆総大将 下間侍従頼純 （25代前後）

本願寺坊官金沢御堂武将前加賀一向一揆総大将 七里三河頼周 （60代前後）

本願寺坊官金沢御堂武将舟岡城主 坪坂伯耆入道

本願寺坊官武将松任城主（舟岡城主） 若林長門

大坂本願寺門跡門主（浄土真宗本山）

本願寺十一世 本願寺門主顯如上人 30代後半 1543-1592 （38）

本願寺十二世 本願寺新門主教如上人 20代前半 1558-1614 （22）

越後の戦国大名 上杉謙信 始め本願寺と敵対していましたが、天正五年同盟を結び手取川の合戦で織田勢を破ります。天正六年初め急死。仏門に帰依し、謙信和尚と名乗っていました。

## とりごえじょう か が いっこういっき しゅうまつ 鳥越城 と加賀一向一揆の終末

### F1. 城山からの眺望（俯瞰図）



(四男・鈴木采女) 「父上、あれは白山大汝の峰ですね」

采女が指さす先には白山がずんぐりと姿を見せています。

(鈴木出羽守義明) 「そうじゃ、頂には阿弥陀如来がお座りになる。いつも我らを見ていらっしやる」

出羽守は四人の息子を連れ、鳥越山に登ってきていました。

見下ろせば、二曲の館や城を中心として豊かな里が広がり田植えに励む村人の姿が小さく見えます。

(出羽守義明) 「どうじゃ、我らが里じゃ。この山に城を築こうと思うておる」

(采女) 「我らが暮らす館の裏山には、二曲の大きなお城があるではないですか」

(長男・鈴木右京之進) 「采女、そうではない。御本山大坂本願寺では織田信長との戦いに入ったのじゃ。顕如上人様からは、加賀もしっかりと戦支度をするように仰せられておるのじゃ」

兄は、父の考えを末っ子にやさしく話して聞かせます。

(右京之進) 「この度、父上が築城する城は、白山麓の村々、山内を護る城になる。さらに言えば、加賀を護る最後の要の城になる」

(采女) 「兄者、二曲のお城よりも大きいのか？」

(右京之進) 「そうじゃ、数千の軍勢が籠れる十倍も二十倍も大きい城じや」

幼さが残る末っ子の采女は、三人の兄たちと若葉萌える鳥越の山河を目にしていました。

### F2. 鳥越城普請（城門・土塁・空堀）



加賀山内組は、吉野組、牛首組、河内組そして西谷組の四組からなっています。この山内組を率いるのが旗本の鈴木出羽守です。本山本願寺より出羽守という官名と旗を受け、山内組の指導者としての地位を揺るぎないものとしていました。

いま、本山本願寺顕如からの命令で、尾張の戦国大名織田信長の侵略から加賀国を護るため、急いで鳥越山に巨大な

城を築いています。山内衆はもとより加賀四郡の門徒衆は城づくりに巧みでした。

(出羽守義明)「皆の衆、御同朋御同行の衆よ」

出羽守が城門の櫓に登り呼びかけます。御同朋御同行という言葉は、阿弥陀如来の前に平等である、同じ本願寺門徒の仲間であるというような意味です。そう呼びかければ、すべての門徒衆は背筋がピンと伸びたのです。

(出羽守義明)「掘り下げた空堀は深く、高く掻きあげた土塁も二重三重に、堅い守りの構えに仕上がった。山内組の主力、三千の軍勢が籠れる城じゃ。我らが生きる山内を、加賀を護り、本山本願寺の御上人様へ忠義を尽くすことができようぞ」

(山内衆)「おおうっ」

勇敢な山の民、山内衆は歓声をあげて応えます。

### F3. 鈴木館に山内衆、頭領が集う



鈴木出羽守の館に主だった山内衆の組頭たち、牛首組の加藤藤兵衛、吉野組の吉野源次郎、佐良丸兵衛らが集まっています。板敷きの広間の真ん中に囲炉裏が切ってあります。薪の火が盛んに炎を上げ、時折、パチンと火花が弾け飛んでいます。

(出羽守義明)「御足労いただいたのは、ほかでもない。謙信和尚が亡くなられた。そのことは、すでに耳にしておるであろう」

元亀元(1570)年、本願寺が信長と全面戦争に突入して以来、八年の歳月が流れていました。南加賀も平野部は大半が信長軍に踏み荒らされる日々でした。大坂本願寺は、長年敵対していた越後の戦国大名上杉謙信と同盟することで信長と戦おうとします。天正五(1577)年、手取川の戦いで柴田勝家が率いる信長軍に対し、勝利を上げた矢先のことでした。

(出羽守義明)「大坂本願寺から直に届けられた頭如上人からの御手紙じゃ。年が明けて間もなく、謙信和尚が亡くなられた。これに動ずることなく、心をひとつにして信心に励むようにとのことじゃ」

(加藤藤兵衛)「出羽守殿、我ら牛首組は越前から国境の谷峠に攻め上る敵をしっかりと防いで参った。これからも、この山内へ一歩たりとも信長の軍勢を入れることはない。みな様がた、ご安心

されよ」

籐兵衛の息子、則親も側に座っています。壁際の吉野組頭領吉野源次郎が、いぶかし気にその言葉を聞いていたのです。

#### F4. 鳥越城内に長兄鈴木右京之進と末子采女



天正七（1579）年、山内組には仰天する事件が起こります。

牛首組が信長軍へ降伏したのです。

（采女）「兄者、牛首組の加藤籐兵衛殿が信長軍に降伏したというのは真実ですか」

采女も前髪を上げ、血気盛んな戦士となっていました。

（右京之進）「その通りじゃ。我ら、背中から牛首組の鉄砲の弾を受けることになる。覚悟せよ」

（采女）「何ゆえです。牛首組が山内組を離れるというのは…」

（右京之進）「その昔、白山頂上の利権の行方をめぐって、朝廷に訴え争ったことがある。結末は御本山本願寺の口利きもあって、牛首村は負けて、尾添村と白山本宮の勝ちに決まったという」

（采女）「そのようなことがあったのですか」

（右京之進）「牛首組の籐兵衛殿のおやじ殿になろうか、山内の一揆衆との戦いに敗れおやじ殿は討ち死にし、息子の籐兵衛殿はしばらく牛首村を追われていた。のちに牛首を取り戻し、山内組に加わったという経緯がある。何よりも修験の霊山白山の利権は、米のとれぬ山内の村々にとって生きるか死ぬかの大問題じゃ」

（采女）「越前の大名朝倉義景殿や尾張の織田信長とあれほどの激しい戦いをしていた牛首組が、今度は我らの敵になったということですね」

（右京之進）「そうじゃ」

#### F5. 石川郡・能美郡・山内の鳥瞰図



天正七（1579）年、朝廷から本願寺と信長との和睦の提案がなされたのです。本願寺ではこれに応えようとしています。

一方で、足許を見るかのように信長軍北陸方面総大将柴田勝家の軍勢が手取川を渡り、石川郡に攻め入ってきます。和睦の条件の一つには能美・江沼の二郡を本願寺へ返還するというのですが、絵に描いた餅。

天正八（1580）年早春、顕如は朝廷の仲介に従って和睦を

受け入れ、本願寺を退城しようとしていました。だが、顕如の長男教如が「信長、信じられぬ」と、そのまま城に籠り続けたのです。

その頃です、顕如からの戒めの手紙が、鈴木出羽守宛てに届けられます。「教如から戦いを続けよと言ってくるであろう。すでに和睦したからには、たとえ信長軍が攻めて来たとしても刀を抜き戦うことを禁ずる」

これを受け取った山内衆は、戸惑いを隠せませんでした。相次いで教如からは「信長との戦いを続けよ」との手紙が届き、山内組は教如に従い戦うことを選びます。

(采女)「兄者、柴田勢が我が物顔に木越の光徳寺砦を落とし、金沢御堂へ攻め懸っています。父上は金沢御堂を助けに向かわぬのですか」

(右京之進)「金沢御堂で指揮する総大将下間頼純様の指示に従って、軍勢を動かすのじゃ」

絵図を広げて扇子の先で示し、采女に説明します。

「鳥越城はここじゃ。手取川の流があつて、その平野には若林長門殿が守る松任城、劔には坪坂伯耆様が守る舟岡城、そして犀川と浅野川にはさまれた金沢御堂じゃ。我らは山内の険しい地形を味方に、最後の砦として山内を守るのが役割だと心得るが良い」

## F6. 西河（犀川）口合戦図



(右京之進)「采女、いよいよ出陣じゃ。松任城の若林長門殿と連絡を取り、信長軍の柴田勝家と佐久間盛政を討つ。心してかかれ」  
金沢御堂の戦いに敗れ、一旦は金石の浜の方へ退いていた一揆の兵と松任組、山内組が佐久間勢を挟み撃ちにし、犀川周辺の合戦では二百余を討取り勝利します。

出鼻をくじかれた佐久間勢は、兵を引く山内組の軍勢に追激戦を挑もうとする。だが、鈴木出羽守に率いられた山内組の軍勢は良く知った地形を巧みに利用し、再び山内之口の合戦において佐久間勢六百余を討取るのです。信長軍は、一揆勢を恐れ、しばらくは山内に近づくことすらできませんでした。

(采女)「父上、おめでとうございます。二度にわたって、御味方の大勝利でございます」

父、出羽守は少し頬を緩めただけで、勝利を心から喜ぶ様子はなかったのです。そんな父を采女は不思議に思いました。

#### F7. 鈴木出羽父子5名、松任城に謀殺される

その朝早く、数人の門徒兵に連れられ、信長軍北陸方面総大将柴田勝家の使者だと名乗るひとりの僧が二曲の鈴木館を訪ねてきました。

(出羽守義明)「みな、集まったか。そなた達に話すことがある」

鈴木出羽守の四人の息子たち、吉野組の吉野源次郎が、出羽守の口元を眺めます。

(出羽守義明)「みなよく戦った…。今朝、柴田勝家殿から和睦の申し出があった。御本山大坂本願寺との和睦の約束事はむろん、我ら山内組も今まで通り山内の支配を認めるという。それゆえ信長軍に降伏し、仕えるようにとのことである」

(采女)「信長軍に降伏するのですか。和睦の約束など信じられません」と言葉を荒げます。

(右京之進)「静まれ、采女。最後まで良く聞くのじゃ」

(出羽守義明)「明日、返答を出そうと思う。すでに御本山本願寺の顕如上人様からも厳しく停戦を命じられておる。山内組の支配は今まで通りという約束が守られるならば、信長殿に仕えることにしたいと思う」

柴田勝家に御礼のため、鈴木親子五名はわずかな兵を率いて信長軍に占領された松任城へ向かいました。



時代は情け容赦のない戦国の世です。鈴木出羽守親子は松任城の柴田によって首を切られます。首は遠く信長の安土城城下に運ばれ、加賀一揆の頭領十九名の首として晒し物にされてしまいました。

だま騙し討ちは戦国武将の戦いのひとつの手段です。これを見抜くのも戦いでした。

主を亡くした鳥越城は、柴田勢の猛攻に耐えられず、あっけなく落城してしまいました。

## F 8. 鳥越城攻め、山内組の夜討ち

(天正九年二月)



残雪も凍てつく闇に、鎧よろいの擦れ合う音を消し信長軍が守る鳥越城へひそかに近づく軍勢がいます。時折、雪あかりに動く人影が見えます。

(吉野源次郎)「大手門へは近づけるだけ近づき鉄砲を放ち、火を懸けよ。それを合図に四方から攻め上げるのじゃ」

夜の闇に紛れ戦いを仕掛けたのは吉野組を主力とした山内組一揆衆です。元はといえば、自分たちが築いた城です。城内は隅々まで知っていました。

(吉野源次郎)「出羽守殿かたきだうの仇討ちよ。心して戦に臨むのじゃ。南無阿弥陀仏なむあみだぶつ」城兵が眠る真夜中、城の三方から攻撃を開始します。最も守りの堅い大手門は鉄砲の打ち合いです。夜明け前、敵の弾薬箱に火が入り、大きな爆発音を伴って門は谷に崩れ去りました。それを機に城内へ雪崩れ込んだ一揆勢は城兵三百余を残さず討取り、吉野組の大勝利です。

鳥越城の落城を知った佐久間盛政さくまもりまさが鳥越城へ攻め寄せ、城は再び奪われます。

## F 9. 本願寺教如上人越前穴馬から雪の山内へ、さらに五箇山へ

(天正十年二月)



雪深い峠を越え、降りしきる雪の中、山内吉野組の門徒に守られながらひとりの僧がゆきます。僧は本願寺を信長に明け渡し、秘かに越前えちぜんから加賀を経て越中五箇山を目指していました。

僧の名は本願寺教如ほんがんじきょうによです。本願寺を甲斐府中に、甲斐が難しいのであれば越後春日山えちごかすがやまに再興を望んでいたのです。

## F 10. 吉野源次郎が指揮する吉野組が、再び鳥越城の織田勢に挑む



吉野谷の村に入った本願寺教如の姿を前に、村人は奮い立ちます。何人かは大阪本願寺合戦に参戦し、鎧よろいをまとい戦場に立つ教如の姿を目の当たりにしていました。

(吉野源次郎)「皆の衆、吉野組の御同朋御同行衆おんどうぼうおんどうぎょうしゅう…。再び鳥越城を奪い返すのじゃ。教如様も我らの戦い、阿弥陀様への感謝の戦いを見ておられる。今度は敵も油断してはおるまい、心してかかれよ。我らの里、山内を取り返す戦いくさぞ」

しかし、信長軍はかたく城を守り、城攻めは失敗に終わります。

#### F 11. 吉野組、佐良城に必死の戦い



(佐久間勢)「修験者の道筋じゃ。人が渡れる浅瀬じゃ。静かに渡り向こう岸の吉岡の砦を攻め落とすのじゃ」

瀬を渡ってゆくのは、信長軍の佐久間らの軍勢です。

手取川南側の要所という要所は、信長軍柴田勢が攻め寄せ、吉野組は袋の鼠、完全に包囲されていたのです。

吉岡の砦は瞬く間に柴田勢の大軍に踏みつぶされます。吉野組の男達は佐良城で必死の戦いを挑み、次々と倒れてゆきます。

女、子供が逃れるために時間を稼いでいました。

信長軍の戦のあまりの惨さを見かねた牛首の者たちに助けられ、女、子供は見逃され、蛇谷から山を越えて飛騨へ逃れたわずかな人々がいたそうです。

#### F 12. 数百人磔に。山内の雪の山野が赤く染まる



吉野谷、尾添の吉野組の村々から、一揆兵が数珠つなぎに縄に縛られ引き立てられてきます。信長軍は一人として降伏を許しませんでした。女、子供、老人も、見つけ次第切り捨てられたのです。力尽きて生き残った数百の吉野組一揆衆は磔に懸けられ、まだ浅い春の淡雪は赤く染まり、吉野、佐良、瀬波、市原、木滑、中宮、尾添の七カ村は全滅し、三年もの間、村に人影が絶えたといえます。

七カ村には、山内を逃れた人々の末裔によって、子殺し、隠れ谷という地名が、今も語り伝えられています。

自由と信仰のために戦い続けた人々の物語です。これが私たちの先祖が一所懸命に戦った「加賀一向一揆」の最期の姿です。